

2 「児童生徒支援の効果的な取組について」
～不登校・不登校傾向の児童生徒への
学習支援の話合い等より～

P.15 ～ P.27



©埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまっち」

ガイドブックP6 学級での居場所づくり

- ・ 児童生徒が「自分という存在が大事にされている」「心の居場所になっている」「学校が自分にとって大切な意味のある場になっている」と実感できる学級づくりを目指します。
- ・ 協働的な活動を通して、児童生徒自らが絆を感じ取り、紡いでいけるような場や機会を提供します。



- (1) 学校研究として「親和的な学級経営の充実」を重点的に取り組む
- (2) 校内研修の充実（模擬学級会の実施、複数回の授業研究会の実施、指導者の招聘 等）
- (3) 「学級経営リーフレット」の活用（アンケートを分析し、児童の実態と変容を「見える化」する）

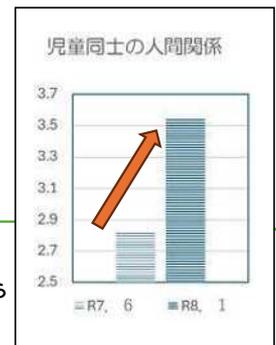
(1) 校長が目指す「学ぶ喜びや感動を味わうことができ、笑顔と意欲と思いやりにあふれる、明るく元気な学校」の実現に向け、教職員・保護者・地域の方々の願い、そして児童の実態をとらえ、学級活動（学級会）及び学級経営の充実を目指した学校研究主題を設定した。学校研究を通して身に付けさせたい力を明確にし、話し合い活動を充実させ、すべての学級で「支持的風土」「心理的安全性」が醸成された学級経営が行えるよう研究を推進した。



(2) 校内研修の一環で、夏季休業中に教職員による模擬学級会を行った。研修を通して、合意形成を目指した話し合いの方法や手順について深く理解するとともに、児童の目線に立ち、学級活動（学級会）を見つめることで、児童の感じている「困り感」や「葛藤」について、体験的に理解できる研修とした。また、研究主任が中心となり、若手教職員の困り感に寄り添いながら、学級経営の充実を主眼に置いた、校内自主勉強会を定期的に行った。



(3) 埼玉県教育委員会「学級経営リーフレット」を活用するとともに、継続的に「学級経営リーフレットに係るアンケート」を実施することで、学年や学級の状況を客観的に把握し、それぞれの学級において具体的な指導・支援に生かせるようにした。また校内授業研究会では、各種調査で把握したデータをもとに、個別の児童にスポットライトを当て、当該児童の変容等を具体的に見取り、一人一人の成長に着目しながら研究を進めた。



【成果】 よりよい学級経営につながる『児童生徒の望ましい人間関係』の向上
 令和7年6月（2.82%）→令和8年1月（3.53%） ※学級経営リーフレットの質問項目から
 （質問項目①：学校の友達は自分のよいところを認めてくれますか）
 （質問項目②：あなたの学級は色々な活動にまともに取り組んでいると思いますか）

【児童の変容】実践研究を進めた先生方が気づいたこと

- ・ 友達の発表に、熱心に耳を傾ける様子が見られるようになった。
- ・ 人の意見を聴いて、その意見を取り入れて自分の意見を言える児童が増えた。
- ・ 他教科でも友達の意見を聞いて、他の児童の意見とのつながりを気にしながら発表できるようになった。
- ・ さまざまな授業で学習内容を深める「意味のあるつづき」が多くなった。
- ・ 何かにつけて話し合いで解決しようと考え、それぞれの関係性や自身の立ち振る舞いを考えながら学習や生活をする児童の姿が見られた。
- ・ 自分たちでやってみよう、やってみたいという、意思や意見がたくさん出るようになってきた。児童は、何かの取組を任せられると一層やる気を見せていた。
- ・ 困っている友達をそのままにせず、声をかけるなど、友達どうして関わり合う姿が多く見られるようになった。

ガイドブックP6 児童生徒との信頼関係づくり

- 児童生徒の気持ちや本音を上手に引き出す共感的な対応など、相談力を向上します。

- (1) 1人1台端末を活用した「心の健康観察」(無償アプリ)の実施
- (2) 児童に寄り添った取組の実施



- (1) 1人1台端末を活用した「心の健康観察」(無償アプリ)の実施
 - 生徒は毎朝登校後、タブレット端末から心の状態等を入力している。質問項目は、体調や心の状態(天気マーク)を選択したり、伝えたいことを自由記述したりできるようにしている。【写真1】
 - その後、担任がクラスの生徒の入力結果を確認し、管理職、養護教諭等は全校生徒の入力結果を確認している。【写真2】
 - 収集したデータは「心の健康観察実施フローチャート」に基づき、役割を明確にして組織的に対応している。担任や養護教諭が朝の会終了後や休み時間等に個別の声掛けや面談を行ったり、担任の要請により、相談員やSC・SSWとの面談も実施したりしている。【写真3】

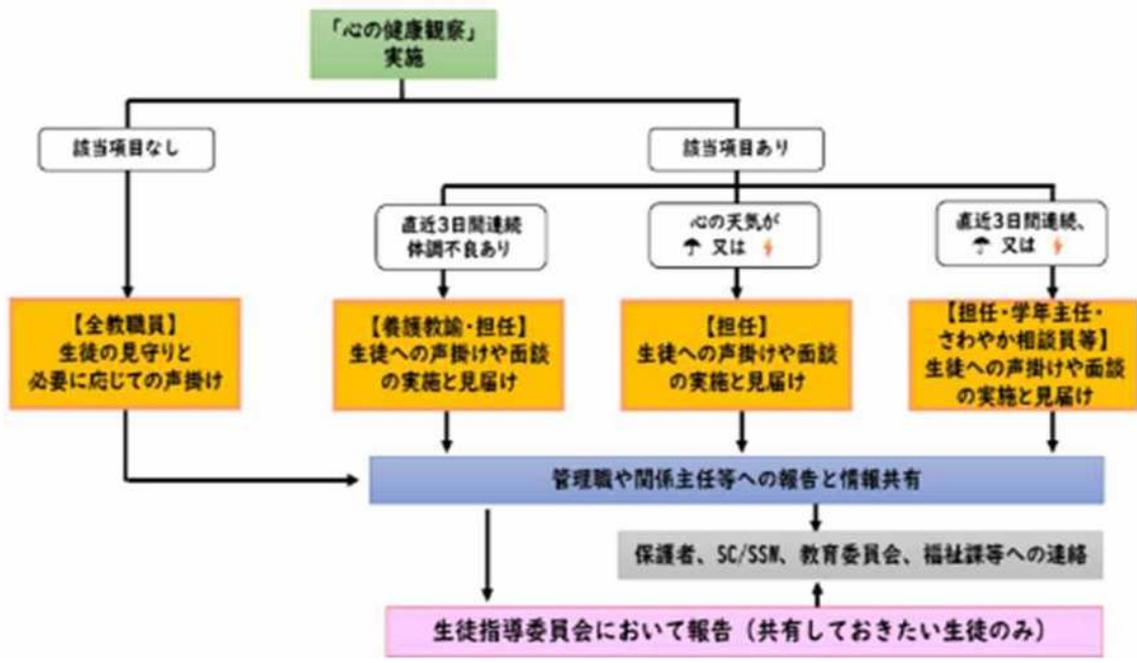
【写真1】データ項目

質問	回答群
学年・学級・出席番号を書きましょう	学年/学級/出席番号
今日の体調は、どうですか。	1 元気 / 2 風邪 / 3 腹痛 / 4 気分不快 / 5 下痢 / 6 ケガ / 7 その他
今日の心の天気は何ですか。	1 晴れ ☀️ / 2 曇り ☁️ / 3 雨 🌧️ / 4 雷 ⚡️
今日の学校生活で楽しみなことや先生に伝えたいことを書きましょう。	自由記述

【写真2】データを確認する教職員



【写真3】心の健康観察実施フローチャート



(2) 児童に寄り添った取組の実施

「3日調査」による分析から、長期休業後に不登校児童が増加傾向であることを捉え、校内研修で、「不登校増加の原因」について、グループセッションを行った。その際、児童が長期休業明けの学校生活に無理なく馴染めるようにするために、次の児童の目線に立った取組を全クラス同一歩調で実施することを決定。【写真1】

○夏季休業中の取組

- ・全児童へのはがきの送付（2学期開始1週間前）【写真2】
- ・ICT 端末を通して、教師から写真やコメントの発信（2～3回）
- ・長期休業明けに不安を抱える児童への電話連絡

○夏季休業明けの学期はじめの取組

- ・全クラスで学期当初に楽しみをもてるような学級レクの実施【写真3】

【写真1】 校内研修の様子



【写真2】 全児童へのはがきの送付



【写真3】 長期休業明けの学級レク



【教職員の相談力向上】

児童生徒が発するSOSを受けとめるためには、教職員の相談力向上が重要です。

教育相談部会が企画する校内研修、教育相談に関する機関研修への参加のほか、教員とスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーによる相互コンサルテーションの機会を持つことなどが考えられます。

「相互コンサルテーション」とは…

児童生徒の問題で悩む者に対して、より効果的な指導・援助のあり方を見つけられるよう、異なる専門性や役割をもつ者がアセスメントや対応策について話し合うこと

ガイドブックP7 SOSの出し方に関する教育

悩みがあることは「恥ずかしい」と思い込み、人に相談することを否定的に捉える児童生徒がいます。成長途上にある児童生徒が、甘えたり、弱音を吐いたりして、信頼できる大人に助けを求めることは、適切に依存できるネットワークを築いて自立へと踏み出す一歩であると理解するとともに、児童生徒に対してはSOSの出し方に関する教育（メンタルヘルスリテラシー教育）を実施します。



※メンタルヘルスリテラシーの充実

心の不調が急増する思春期の児童生徒と周囲の大人が、正しい知識を獲得し、心の不調に早期に気付く力やSOSを出せる力を身に付けること、そのSOSを適切に受け止めること、SOSを出せない児童生徒へのアプローチ、組織的な対応へとつなげていくための体制整備などを行うこと。

DVD

「埼玉県メンタルヘルスリテラシーツール」
※各市町教育委員会を通して各学校に配布済



【メンタルヘルス研究推進校の主な取り組み】

- ・メンタルヘルスリテラシーの向上に向けた教育の充実及び生徒指導・教育相談体制の強化を目指した具体的な取組を推進。
- ・「埼玉県メンタルヘルスリテラシーツール」の効果的な活用
- ・定期的に（週に1回等）教育相談部会を開き、早期発見・早期対応が可能な教育相談体制の構築。
- ・「心と体のアンケート」を実施し、必要な対応を早期に開始。
- ・教職員の理解力・対応力向上のための教職員研修の充実。
- ・メンタルヘルスリテラシー授業の実践。

- 校内の教育相談体制を構築し、週に1回教育相談部会を開き、タブレット端末を活用したアンケート（心と体のアンケート）等から得られた情報を共有し、悩みのある生徒の早期発見・早期対応を行った。教育相談部会には、SCや特別支援コーディネーターなどが参加し、専門的な立場から助言を行った。日常的に「小さなケース会議」を行っている。

【心と体のアンケートの質問例】

- 直近2週間について質問 ※選択肢5つの中から選択
 - ・明るく、楽しい気分で過ごした。
 - ・つかれがとれて、気持ちよく目覚めた。
 - ・生活の中に、興味のもてることがあった。 など
- ※ 児童生徒は、回答内容により、追加の質問項目へ答えられるようになっている。

- 職員の理解力・対応力向上のための教職員研修を実施。
 - ① 研修を年間計画への位置付け。
 - ② メンタルヘルスリテラシーツールの研修動画の視聴。
 - ③ メンタルヘルスリテラシーツール研修リーフレットの繰り返しの活用。
 - ④ 実践記録の引継ぎ。
- 児童生徒のメンタルヘルスリテラシー向上を目指し、メンタルヘルスリテラシー授業を実践した。

授業では、基礎的な知識の習得するとともに、具体的な相談機関や相談できる人を知ることの重要性やロールプレイング（相談する側、される側の体験）などを通して具体的な「SOSの出し方」を学習する。友達の言葉を傾聴し、やさしい気持ちで接しようとする態度がみられた。



「自殺予防教育/SOSの出し方に関する教育」へのリンク（県教委・生徒指導課 HP）



メンタルヘルスリテラシー授業の実施

ガイドブックP8 組織的な対応

ガイドブックP9 不登校対策を担当する教職員の明確化

- ・ 不登校の要因・背景は複雑化・多様化しており、また一人一人異なります。担任1人ではできないことも、他の教職員等とチームを組み役割分担することで、指導・援助の幅や可能性が広がります。
- ・ 組織的な不登校対策を機能させるには、コーディネーターの役割を果たす教職員の存在が重要です。そのような役割を担う教職員を不登校対策担当教員として校務分掌に位置付けます。



- (1) **機動的な「小委員会」を組織し、効果的に運用する事例**
- (2) **養護教諭、教育相談主任を「不登校対策担当教員」として効果的に機能させた事例**
- (3) **小いの連携・小中連携の充実を通して、「統合期における中一ギャップ」に対応した事例**
- (4) **生徒指導主任が担任を務める状況であっても組織的な対応が行えるように仕組みを整備した事例**

(1) 機動的な「小委員会」の効果的な運用

- ・ 少人数（管理職、教育相談主任（不登校対策担当教員）、養護教諭）で、毎週木曜日6時間目に、「小委員会」を実施する。担任を中心に作成した不登校傾向児童に係るシンプルな報告書をもとに「小委員会」でアセスメントする。そして、具体的な対応策を検討し、全職員に速やかに共有することで、担任等のキーパーソンから具体的な支援をスピーディに実施できるようにしている。その支援の効果について、次回の「小委員会」で検証し、次の支援につなげている。

※「アセスメント」とは、支援対象となる児童生徒の情報収集・分析を行い、状況を多面的に把握すること

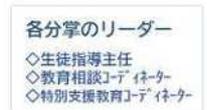
- ・ 生徒指導主任、教育相談主任など少人数で、給食の時間に「ランチミーティング」を計画的に実施（その際、学級の給食指導は、担任外が行う）。「ランチミーティング」では、不登校生徒への支援の状況や直近の生徒指導関連事案についての共有と対応策の検討をするとともに、毎週の生徒指導委員会の事前打ち合わせを行い、実際の生徒指導委員会の協議事項を焦点化できるようにする。

【シンプルな報告書（例）】

担任氏名(キーパーソン)							
児童氏名	新規・継続	継続	状態	状態！登校は辛いがない不安を感じている			
年 組	年 組						
指導目標(最終)							
短期指導目標(1~2か月)							
短期指導目標を達成するための方策	いつ・どこで・だれが・何を・どうする						
昨年度 欠席日数	今年度 欠席日数	日	日	特記事項			
		木曜日	金曜日	月曜日	火曜日	水曜日	合計
欠席状況		10月1日	10月2日	10月3日	10月4日	10月5日	
欠席1. 遅刻早退0.5							
学校での対応(いつだれが何をどうした)							
電話連絡(いつだれと何の話をしたか)							
家庭訪問(いつだれがどうしたか、だれと何の話)							
その他の記録等							
小委員会での検討事項							

(2) 養護教諭、教育相談主任が「不登校対策担当教員」として効果的に機能している事例

- ・ 養護教諭が、生徒指導委員会や教育相談委員会等に参加し、児童生徒の情報や見立てたことを伝える機会を設ける。
- ・ 養護教諭が“情報のハブ”となり、SSR、保健室、相談室に係る職員の連携について調整している。また、必要に応じてSCやSSWとの連携を促し、児童生徒の問題で悩む者に対して、より効果的な指導・援助のあり方を見つけられるよう、異なる専門性や役割を持つものがアセスメントや対応策について話し合えるようにしている（相互コンサルテーションの機会をつくる）。



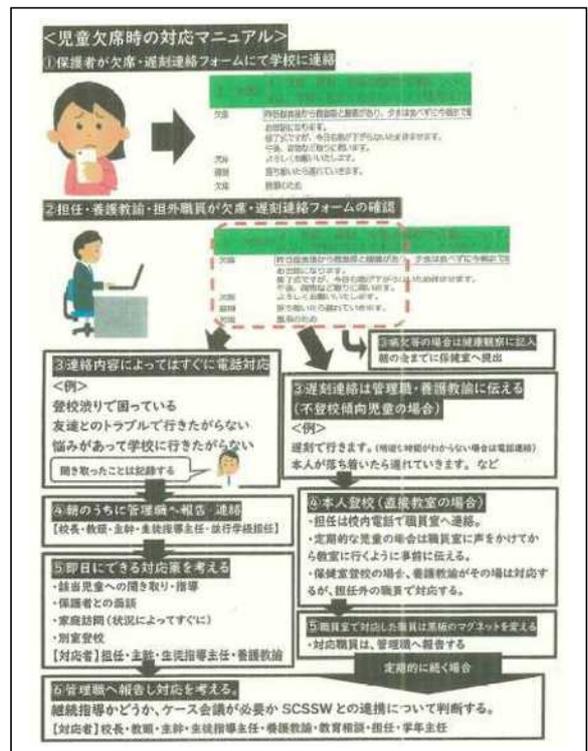
- 教育相談担当が、担任等に当該生徒の様子を聞き取り、【状態】を把握し、「3日調査」等に記録している。
 (教育相談主任が“情報のハブ”となる)。また、情報を得て、その都度協議し、対応策を検討し、具体的な支援が適時適切に行われるようにしている。「3日調査」等に記録することで、全職員が全生徒の現状及び支援の状況を把握できるようになっている。教育相談主任の働きかけが、職員室において、風通しのよい雰囲気醸成を促している。その結果、すべての職員が小さな生徒の変化を察知したら、すぐに情報共有し、具体的な支援の手立てを講じることができるようになっている。職員室内で“対話の文化”があり、気軽に情報交換ができる環境が整備されている(担任等が抱え込まない雰囲気がある)。

(3) 小小連携・小中連携を通して「統合期における中一ギャップ」に対応した事例

- 小学校相互の交流(行事での交流、オンラインで授業交流、体験的学習をともに行う、町内の小学校でドッジボール大会等)や小中の交流(児童会、生徒会合同の挨拶運動、先輩へのインタビュー、授業体験学習、清掃活動体験会等)を通して、児童の心理的な不安を軽減し、スムーズな中学校生活へつなげた。
- 小中の教職員が授業参観、情報交換会、合同研修等を通して、児童実態の把握、対応策の協議、指導方針のすり合わせなどを丁寧に行う。特に、中学校側が、関係生徒のこれまでの様子を知ることで指導支援策を検討することができている。
- 小学校の垣根を越えて生徒指導関係の事項について、検討・協議する協議会を創設。組織の事務局は教育委員会が担う。校則の見直しや「小中連携シート」の利活用等について協議を行った。

(4) 生徒指導主任が担任を務める状況であっても組織的な対応が行えるように仕組みを整備した事例

- 生徒指導主任(不登校対策担当教師)が学級担任を務める現状においても組織的な対応ができるように、学校独自の「欠席時対応マニュアル」の作成、出席状況を全職員で確認できるホワイトボードの整備、「不登校支援ガイドブック」、「3日調査」、学校独自のリストを効果的に活用している。
- 「欠席時対応のマニュアル」には、欠席が目立つ児童を担任が把握した際に、抱え込むことがないように、いつ、だれに、どのように報告するか、そして、どのような手順で対応策を検討し、具体的な支援を実行するか明示されている。(右の図) こうすることで、生徒指導に係る事項について、学校としての方針と具体的な指導支援内容について共通理解を促すとともに、常に現状を学校全体で把握しながら共通行動がとれるようにしている。



不登校未然防止に成果を上げている学校に共通していること

- ① 管理職や担当教師を中心に、組織的な対応を行っている。
 (教職員間で風通しがよく、情報がすぐに、適切に共有される。「担任任せ」、「学年任せ」にしていない)
- ② 「3日調査」や「長期欠席者等の支援状況確認リスト」の活用し、組織的に一人一人を「状態別」で見立てるなど丁寧にアセスメントし、適切な支援につなげている。
- ③ ①、②などの取組の結果、早期からの不登校傾向の児童生徒を把握し、迅速に対応している。
- ④ 特別活動の充実など、発達支持的生徒指導を充実させている。
- ⑤ 小中の滑らかな接続について、効果的に取り組み、9年間を見据えた支援を行っている。

ガイドブックP20 別室の有効活用

学校・学級にうまく馴染めない児童生徒が安心して過ごせる一時的な居場所として、また、一度不登校になった児童生徒が学校に戻りたいと思った際のステップとして、別室を活用した支援が効果的です。

※以下、校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）を「SSR」と示しています。

【実践事例①（中学校の取組）】

- ・ 保健室、相談室、SSRでの生徒の居場所の整備。それぞれの場所で個別最適な支援をうけられるようにしている。
- ・ 経験豊富な相談員による「つなぐ」支援（該当生徒の学習や生活の状況把握の把握、担任との橋渡しをする等）《写真1》
- ・ 「風通しのよい相談室」となるよう、入り口の環境整備。
- ・ SSRからのオンライン授業への参加できるように体制を整備。
- ・ 関係職員（生徒指導対応教諭、未然防止対応教諭、さわやか相談員、校内教育支援センター支援員）による1日1回の情報交換の実施。

写真1

当該生徒の生活記録を担当に届けられるようにしている



【実践事例②（中学校の取組）】

- ・ 生徒の実態に合わせた多様な「別室」の整備及び運営。
- ・ 生徒の状況、状態に応じ、自主学習ルーム、個別学習ルーム、相談室を使い分け、複数の選択肢と生徒の自己決定を意識した支援を実施。《写真2》

写真2



【実践事例③（中学校の取組）】

- ・ 教室に入ることが難しい生徒への対応として、SSRを教室の隣に設置し生徒相互の自然な交流を促進。《写真3》
- ・ SSRとは別に自習室を整備し、個別の学習支援をする場所として整備し、運用。
- ・ SSRの担当支援員との不登校対策担当教員、担任等が積極的に情報を共有。
- ・ SSRや自習室で支援する教職員を明確にするために「持ち時数一覧表」に「SSRの個別支援担当」を明示。

写真3



【実践事例④（中学校の取組）】

- ・ 職員室、保健室、相談室、スペシャルサポートルームをフロアの並びに設置することにより、生徒の移動、生徒と教職員とのかかわりのスムーズにしている。《写真4》

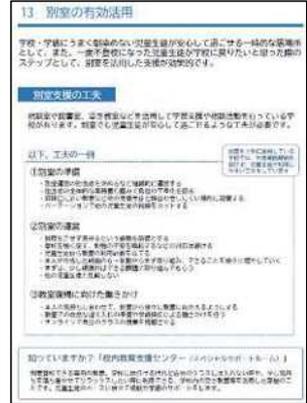
写真4



【実践事例⑤（小学校の取組）】

- ・ パーテーション、ソファ、ぬいぐるみ、掲示物等により居心地のよい、簡素で温かみのある部屋を整備。《写真5》
- ・ 行間休みなどにすべての生徒に開放し、児童にとってなじみのある部屋にする。
- ・ 低学年の児童が主に活用しており、恒常的に配置している県費常勤職員が、児童への直接の支援にとどまらず、保護者への支援、SC、SSWなどとの連携など、児童一人一人の支援をコーディネートしている。
- ・ 児童の状態や支援の状況について、記録をとり、全職員に共有している。（情報の“ハブ”となる。）

写真5

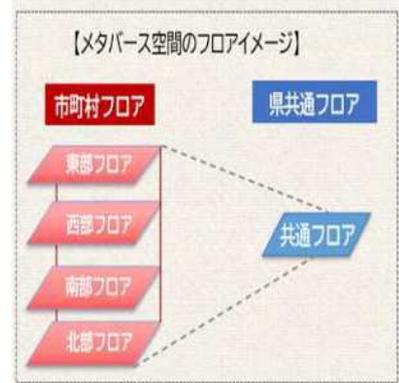


ガイドブックP23 メタバース空間を活用した不登校児童生徒等支援事業

メタバース空間に不登校児童生徒等の居場所・学びの場を設置し、学習支援や相談支援を実施

人との対面でのコミュニケーションに対する不安や、自宅からの距離が遠く地元の教育支援センターへ通うことが難しいことなどにより、これまでの取組では支援が届きにくい児童生徒に対して、自分自身の状況に合わせて、自由にアクセスし、アバターを使ったコミュニケーション等が可能であるメタバース空間の特徴を活かした支援を行っている。

メタバース空間は、市町が共同で運営するフロアと県が運営するフロアで構築されている。



(1) 市町フロアにおける学びの保障に向けた支援（市町が共同で運営するフロア）

生活リズムを整え、1日のメリハリをつけることを目的とした「朝の会」を開催している。また、学習から離れている児童生徒が再び学ぶ意欲を持てるよう、「取り組みやすく、興味関心を引く内容」や、「クイズやゲームを取り入れた内容」を中心とした「オンライン学習」を実施している。さらに、日常のコミュニケーションを通じて児童生徒の居場所づくりにも取り組んでいる。

○ **実施場所** 「メタバースプラットフォーム」 ※北部フロアは北部地区 12 市町で運営しています。



12月カレンダー 2025年(令和7年)

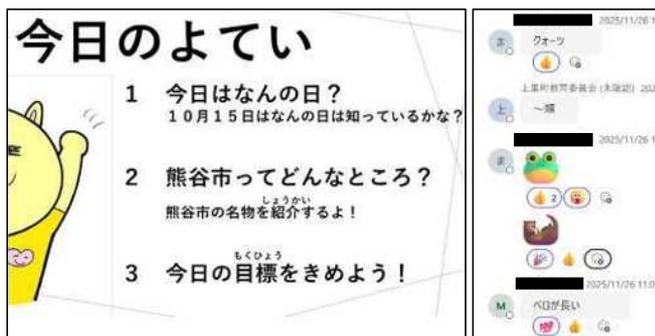
日	月	火	水	木	金
30	1	2	3 熊谷市 (D)	4	5 秩父市 (A)
	6	7	8	9	10 蕨市 (B)
	11	12	13 新谷市 (C)	14	15
31	16	17 群馬市 (D)	18	19 秩父市 (A)	20
	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30

○ **支援の内容（北部フロア）** ※令和7年度の実績

開放曜日：月～金	朝の会	オンライン学習①	オンライン学習②
オンライン学習教材を使った自習	10:25～10:35 (水・金 開催)	10:45～11:30 (水・金 開催)	13:15～14:00 (月～金 開催)

○ 「朝の会」(実施例)

今日は何の日／朝の脳トレクイズ／今日のなぞなぞ
写真を見て大喜利／今日の目標を教えて
【オンライン朝の会の様子】

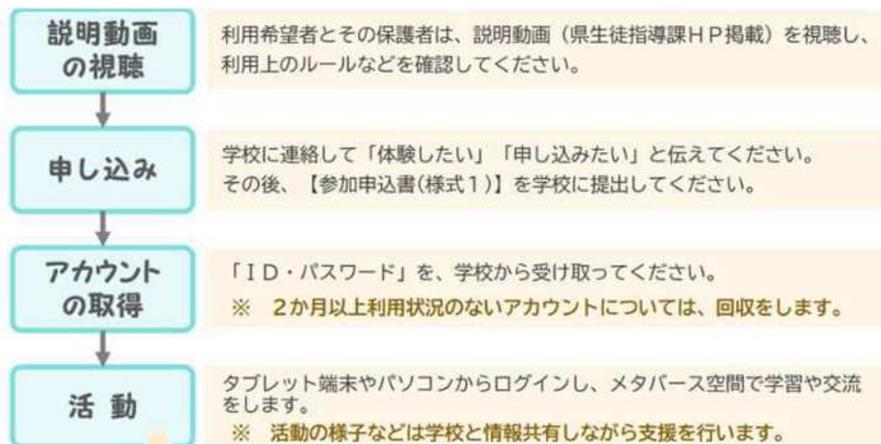


○ 「オンライン学習」(実施例)

地球のことを知ろう／数当てマジックのヒミツ／
一人一人が救命士／和食について知ろう
【オンライン学習の様子】



○ 活動までの流れ



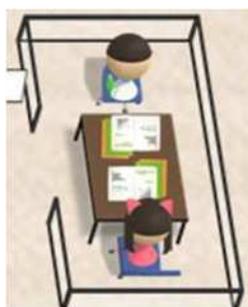
※「ID・パスワード」の発行は、申し込みから2週間ほど期間を要します。

各小中学校においては適宜申請を受付していただき、市町教育委員会へお問い合わせください。

(2) 県共通フロアにおける県の相談等の支援

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー（心理・福祉の専門家）による相談を実施している。

また、博物館や美術館と連携したオンライン社会科見学や、民間企業と協力して各企業の特徴を活かしたゲストティーチャーによる講座なども行っている。加えて、同様の取組を行っている他の都道府県と連携し、オンラインでの体験活動の情報交換を行い、互いの児童生徒が参加できる体制を構築するなど、多様なオンラインイベントを実施している。



【SC等による相談支援】【博物館等と連携した体験活動】

(3) メタバース空間にて児童生徒用のオンライン学習教材を提供（教科書に対応した教材、小学1年生～中学3年生の5教科対応、全教科に自主自立学習用の動画による解説 等）

(4) 利用者の声

児童生徒の声

- 「毎朝のクイズが楽しみになった」
- 「デジタルで学習復帰ができた」
- 「交流やタイピングのスキルが上がった」
- 「学校に登校するきっかけになった」

保護者の声

- 「外とのつながりができて嬉しい」
- 「学習意欲や生活リズムの改善が見られる」
- 「子どもに合ったデジタル学習が進んでいる」
- 「保護者の負担が軽減された」

教職員の声

- 「居場所の提供に役立っている」
- 「子どもの学びの意欲や、前向きな変化を確認することができた」

市町教育委員会の声

- 「ICT活用による支援の可能性を感じる」
- 「ログ情報の充実など今後のさらなる改善を期待したい」

(5) 令和7年度事業の成果

- ・北部地区では児童生徒31人が申請しており（1月末時点）、新しい居場所として機能している。
- ・不登校児童生徒等の居場所及び学びの場を設置し、学習支援や相談支援を実施し、児童生徒の社会的自立につながる支援ができた。
- ・指導要録上出席扱いとなった児童生徒が複数人いた。

「各月3日以上、累計30日以上欠席児童生徒の調査」の効果的な活用について
 ～学校における組織的な個別支援の充実を目指して～

【活用目的】

○児童生徒の現状把握を深め、学校生活に課題を抱える児童生徒の早期発見・対応、不登校の未然防止とともに、長期欠席児童生徒への組織的な支援を強化し、今後の生徒指導及び教育相談の改善・充実に資するため。

【調査対象者】

○各月3日以上欠席児童生徒、累計30日以上欠席児童生徒、学校生活に課題を抱える児童生徒
 ※各市町で報告基準を設定

【様式について】

○各市町立小・中学校は、「様式1」に必要事項を記入し、提出する。

【様式1とは】

○「3日調査」と「リスト」の内容を含むExcelファイル。

「3日調査」…「各月3日以上、累計30日以上欠席児童生徒の調査」

(記入上の注意) 記入する際の手順や注意点が記載されている。

(基本学校データ) 学校番号、学校名、記入者、授業日数を入力すると、(月別シート)や「リスト」に転記される。

(児童・生徒データ) 児童生徒名、欠席数を毎月入力すると、(月別シート)や「リスト」に転記される。

(月別シート) (児童・生徒データ)から転記された該当者について、家庭との連携方法、学習保障の方法、その他自由記述、各月の状態を記入。

「リスト」…「長期欠席者等の支援状況確認リスト」

(リスト入力例) 「リスト」の記入例

(リスト入力シート) (児童・生徒データ)から転記された該当者について、さらに不登校の要因や支援状況を確認できる。

(問題行動等調査用データ) (リスト入力シート)から転記され、問題行動等調査に活用できる。

(個人リスト) (リスト入力シート)の通し番号を入力すると個人シートが作成される。

(協議用シート) 会議等で記録をする際に活用できる。

(児童・生徒データ)

(リスト入力シート)

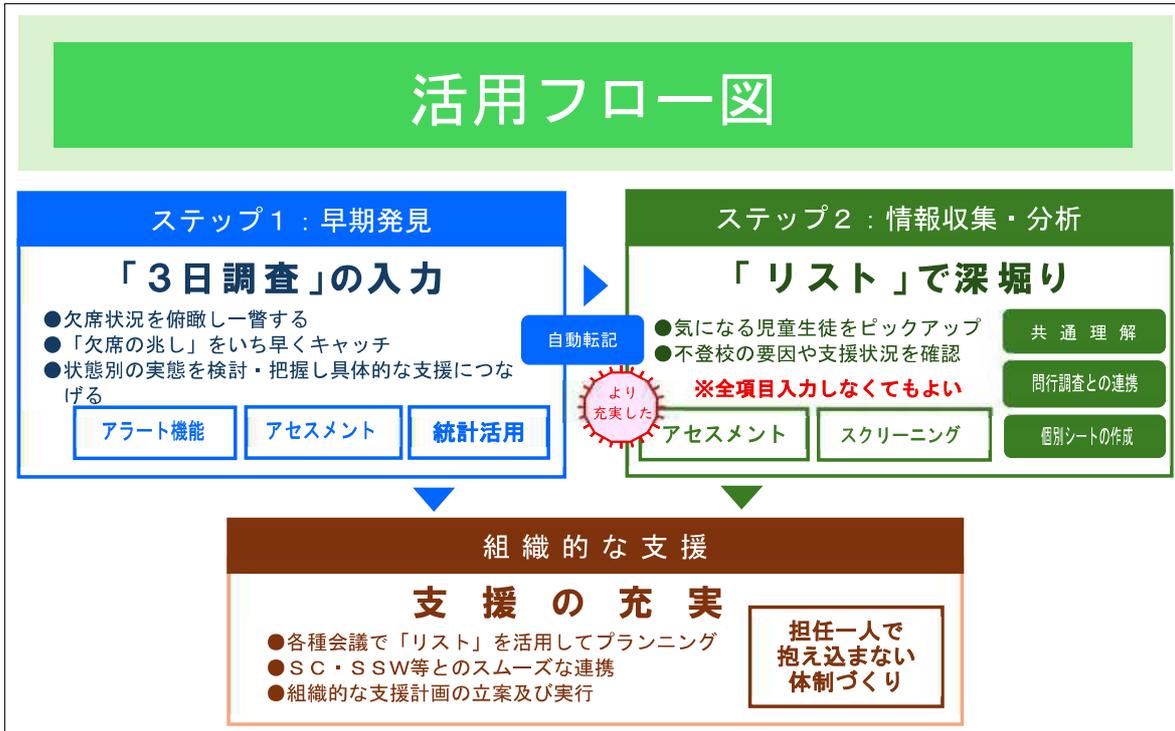
(月別シート)

(問題行動等調査用データ)

(個人リスト)

【効果的な活用方法】

○様式1の「3日調査」と「リスト」を併用することで、「組織的かつ個別の支援」がより具体的に充実する。



【活用例①】

○電子化された「様式」を教職員がいつでも誰でも閲覧・追記できるような仕組みを整備し、担任だけでなく、複数の教職員が常に最新の児童生徒の情報を共有する。

【活用例②】

○年度当初（4月）の報告において、欠席が3日に満たない場合でも、前年度報告していた児童生徒を「児童生徒データ」に入力し、年度をまたいで継続した支援につなげるができるようにする。

様式1 秘 【各月3日以上欠席児童・生徒について（報告）】 <取扱注意>

学年	組	名前	性別	イニシヤル	前年度欠席理由	理由	1	2	3	4	今月	累計	主な要因	家庭との連携方法	学習保障の方法	その他	状態	
1					R4	11					11	11	エ	電話	4 その他	3 プリント	本人、父、校長で電話。①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	状態0
2					R5	16					16	16	ウ	電話	2 訪問	3 プリント	校長・担任で家庭訪問。生徒指導主任と号	状態7
3					R5	13					13	13	ウ	電話	2 訪問	3 プリント	担任の家庭訪問。放課後登校あり。タブレ	状態8
4					R6	2					2	2	エ	電話	3 プリント	親に課題。母が送り出せず毎日遅	状態3	
5					R6	2	1				3	3	ウ	電話	3 プリント	1日欠席。学校生活にも慣れず帰	状態9	
6					R6	1					1	1	ウ	電話	3 プリント	4度と同じ担任で欠席日数も減り落ち	状態2	
7					R6	2					2	2	ウ	電話	3 プリント	1人で欠席。笑顔も増え、学校生活も落ち	状態1	
8					R6	2					2	2	ウ	電話	3 プリント	先人関係で心配。コミュニケーションをとる	状態1	
9					R6	11					11	11	エ	電話	3 プ	週2日ペースで登校。昨年度11月より中	状態3	
10																		

「月別シート」の「その他」欄には具体的な支援を記述し、「状態」を一人一人見立てて入力する。

※令和6年度 県教育委員会発行の
「一人一人の社会的自立に向けた児童生徒支援ガイドブック」
～総合的な長期欠席・不登校対策～
には、児童生徒の「状態」を、「状態0」から「状態8」の
9段階に分け、それぞれの状態に合ったきめ細かな対応
について具体例が示されている。

登校している	登校していない
状態0 学校に馴染んでいる	状態5 学校はできないが学校以外の施設への定期的参加はできる
状態1 登校は辛くないが不安を感じている（元気がない）	状態6 比較的気軽に外出はできる
状態2 心の中では登校が辛い（欠席はしていない）	状態7 家庭内では安定しているが外出は難しい
状態3 基本的には教室で過ごすが遅刻・欠席がしばしばある	状態8 部屋に閉じこもり、家族ともほとんど顔を合わせない
状態4 登校しても教室には入れず別室登校をしている	

